



スキマタイムズ

もっとお互いを理解するための場や時間を

日本自立生活センター自立支援事業所 2014年6月27日発行 第39号

居場所づくり勉強会 第30弾！ ～韓国訪問報告会～

JCILの香田さんとあべさんが7月6日～10日まで韓国に行きます。目的は韓国の障害者団体との交流です。

ソウルとテグを訪問し、当事者団体と交流して、プサンから帰国する予定です。

韓国の障害女性の活動、交通バリアフリー、障害者差別禁止法の成立前後の状況などを調べてきます。

帰国後、韓国で見て聞いて感じたことについての報告会を開きます。

韓国の様子を知ること、京都での私たちの暮らしについても新しい発見があるかもしれません。報告会にぜひご参加ください！

日時：7月24日(木)14:00-16:00
場所：日本自立生活センター事務所
参加費：無料
担当：香田晴子・あべやすし



こころとからだをすっきり！ヨガタイム

ヨガで自分の身体と向き合ってみませんか？ヨガの目的はきれいなポーズをとることではありません。その日の身体がどんなふう動くか動かないか、意識を自分に向ける時間です。呼吸が深くなり、肩こり、腰痛、疲労感もやわらぎます。ぜひ参加してみてください♪

講師は石田久美さんです。

★ヨガ：全身をうごかすヨガ

日時：7月17日(木)18:15-19:30(OPEN18:00)

場所：油小路事務所2F

持ち物：動きやすい服装・タオル・飲み物

参加費：無料

*このヨガクラスは、JCIL自立支援事業所の利用者と家族・介助者を対象にしています。



日本自立生活センター自立支援事業所 編集担当：横川

ご意見・企画のアイデアなど大歓迎！バックナンバーはホームページ↓で読むことができます。

TEL:075-682-7950 E-mail:jcil-kyoto@jcil.jp URL:<http://www.jcil.jp/zigyosho/index.html>



～今、介助に行きます～

辻本 美貴

私はとても忘れやすい性格なので、介助を始めて3年半経った今も、初心者のように指示をもらわないと「あれ、これはどうだったかな？」なんて間違えることはしょっちゅうです。最近では介助先の人とも付き合いが長くなってきて、みなさんそんな私の性格も分かってくださっていて、「しょうがないな～」と許してくださったり、上手く指示をだしたりして付き合ってくださっています。このような時、長年、同じ人の所に入るというのは、お互いにとってやりやすいよなと感じます。

介助者を入れての生活を私は経験をしたことがないけれど、想像以上に大変だと思います。なので、自分が介助に入る時はできるだけ相手に負担がないように、さりげなく介助ができたらなと思います。でも実際はドタバタしたり、物忘れをしたりとさりげなさからは程遠いです。私の夢は介助中に「あ、辻本さん、いたん忘れてた」と言われることです(笑) 以前、介助中に利用者の方が鼻歌を歌っているのを聞いて、なんだか嬉しくてガッツポーズした記憶があります。

それと、私は介助中に一歩前に出ることが苦手なんです。時に、生活の知恵を介助者からアドバイスされて、「これは良いわ」と嬉しそうに話されている方がいたり、介助者の影響で新しい歌手の歌を聞き始めた方がいたりして、互いに良い影響を与えあっているのを見て、素敵だなと感じます。そんな関わりができたらいいなと思います。

ここ最近、知的障害の方の介助に入らせてもらうことも多くなりました。やはり介助の在り方が少し変わるように思います。



例えば、何も予定がない休日の過ごし方で、身体の方は、「今日は何も予定がないから、〇〇してすごしたいので、△△してください。」と介助者に指示を出しますが、知的の人の場合は、「何も予定がないって言われてもどうしたらいいの？ どうやって予定をきめるの？ 分からなくて不安だから、一緒に考えてほしい。」と思う人もいます。介助の違いとしては、「相手の思うように動く」というところと「何が良いか一緒に考える」というところに違いがあると思います。なので、時に知的の人に「あなたの自由にしていんだよ」「あなたが決めて下さい」と相手にまるっきり投げ捨てることは、介助の放棄にもなるのではないかなと思います。(たった今、この原稿を書いているときにも、「どうしたらいいの～？」という電話が当事者の方からかかってきました。)

知的の方で、介助者が側にいると気を使ってしまって、どうしても話しかけてしまったり、こちらの動きに敏感になって意識をこちらに向けてしまわれたりとかで、さりげなく自然に側にいることがなかなか難しいとよく感じます。考え付く限りいろんな工夫をすることも必要ですが、でもそれもきっと時間が解決してくれるだろうなと思います。介助者が側にいることが当たり前になってきたら、きっと鼻歌の1つでも歌ってくださるのではないかなと思います。そういう意味でも、長く介助に入るということは、本当に大切ななと思います。(でも新しい人との出会いによって、新しい風が入ってくることもいいですね。)

介助の仕事長く続けられるように私も日々の生活を送っていきたくと思います。

(2012年7月7日「自由人72号」より一部修正して転載)

JCILは機関誌『自由人』を発行しています。その人気連載である「介助のある風景」や「今、介助に行きます」では、介助をつかっている人、介助をする人が自分の生活や気持ち、生き方を綴っています。いろいろな人がいる！ということをお伝えしたいと思い、この通信でも一部をご紹介します。『自由人』についての詳しい情報は日本自立生活センターの金・内藤(075-671-8484)まで。

総合支援法に変わったよ！ えっ、ほんま？ Part34

自立生活満喫中のリツコさん
でもあんまり難しい話は苦手…



前回の続きやね。精神病院に長期入院している人の、地域移行に関するお話しやったやんね。

確か、入院日数がものすごく長いやんな。もう何十年も入院してはる人がいる。それから、ベッド数も半端なくて、世界の精神病院のベッドの20%が日本に集中してるんやとか。

やから、最近、病棟を改修して、そのまま居住の場にしてしまおう、という案が出てたんやね。

病院の敷地内を移動しただけやのに、退院になるなんて変な話やなあ。

ほんまやわ。
そやけど、なんでこんな話が出たんやろう。

そうなんかあ。でも…？

え〜っ！
病院の都合で、病院から出られへんの！？

嫌な話やなあ。もう決まってもたん？

障害者制度改革について

勉強中のタクオさん

小難しいこともやさしく(?) 解説



うん。前回お話しした通り、日本は精神病院の長期入院が大きな社会問題、人権問題となっているんだっただよ。

うん。だから、日本も2000年に入ったころからようやく、地域移行にとりくみはじめた。だけど、なかなか地域移行が進まないのが現状で…

そう。「病棟転換型居住系施設」というややこしい名前。だけど、ある当事者の言葉を借りると、「要は病院の敷地内で、精神障害者を移動させて『退院おめでとう。ここがあなたの生活する地域だ』ということに等しい。これのいったいどこが、地域移行なのか」ということ。

うん。これからは、病院から街に出る、「院外退院」と、病院内を移動する「院内退院」という言葉ができるかも。「院内退院」って、わけわかんない話だよ。

ずっと長いこと精神病院に入れられ続けて退院しようとなかなか思えない人たちについて、病院で死ぬことと病院内の敷地にある自分の部屋で死ぬこととは大きな違いがある、と考える人がいるのだけど、でも…

でも、実際は、病院の経営上の理由が大きい。病院経営者たちが、ベッド数を減らすだけだったら、赤字経営になる、自分たちが食っていけなくなるって主張してるんだ。

うん。すでに厚労省内では、この病棟転換のための改修費が来年度予算に組み込まれているみたい。病院経営者団体とかと裏で話ができちゃっているのかもしれない。

まだ。今、ちょうど厚労省内の検討会議で大詰めの議論をやっている。たくさんの反対の声が上がってる。もし決まっても、これを骨抜きにして、真に街への地域移行を進める運動が、とても大切だよ。



スキマ☆夏祭り☆ナイト



今回のスキマ・ナイトは、夏休み企画です！
大人だってせっかくの夏の夜を楽しみましょう！
夏祭りといえば、ヨーヨー釣りや射的、たこ焼きにかき氷…。
内容は現在企画中なので、アイデアや道具なども募集します。
お手伝いしてくださる方も大歓迎！！
詳細は来月のスキマタイムズを見てね♪



Prop

日 時:8月1日(金)18:00-20:30 ごろ
(準備 16:00 ごろから)
場 所:日本自立生活センター事務所
担 当:横川



居場所づくり勉強会第28弾報告 ～京都府条例を活用しよう！ 障害のある女性編～

5月20日、「京都府条例を活用しよう！女性障害者編」と題して勉強会を行いました。

まず、世界人権問題研究センターの松波めぐみさんより条例についてのわかりやすい説明があり、香田さんから、これまで自分が体験した差別の体験とともに、「自分より若い人に同じ思いをしてほしくない、だから条例に女性障害者の問題を盛り込もうとずっと働きかけてきた」という気持ちを伝えてくださいました。また、京都府の条例検討委員を務めた村田恵子さんがご自身のことと、京都府の条例検討の様子などを話してくださいました。小泉さんからは、女性らしさ、男性らしさということにとらわれている社会や自分たちの考え方を問い直す発言をされ、「障害の有無や性別で分断されないようにしよう」という力強いメッセージがありました。

参加者からもたくさんの質問や発言があり、条例や、障害のある女性に対する複合差別についての理解が深まりました。参加された岸本依子さんの感想をご紹介します。



5/20 女性障害者勉強会に出席して

「男尊女卑」という言葉がかつて使われていたように昔から女性は差別や暴力の対象になってきたのかな、と思っていました。貧困や自立の困難さは性別を問わないかも知れませんが、虐待や性暴力の被害者はまだまだ女性の方が圧倒的に多いように思います。障害の有無に関わらず、女性が差別や暴力を受けても声を大にして世間に訴えかけるのは、精神的にも身体的にも相当なダメージを受けます。結果、被害者が泣き寝入りすることになり、加害者が野放しにされている事の方が多く、それは同性の立場からしても非常に辛く、また他人事には思えず非常に怖いです。

勉強会の中で、「訴え続けた人がいたからこそルールが出来上がっていく」という言葉がありました。差別に対して立ち向かっていく強い気持ちや、1人でも多くの女性が声をあげていく必要性を感じました。

かつてからあった性別役割分業も表向きにはなくなっただよに見えますが、そういった固定観念はまだまだ現在の日本社会においても見受けられます。男女共、互いに尊重し合い差別や暴力のなくなる日が1日でも早く来てほしいと同時に、もっと1人1人が他人事ではなく自分たちの事として考えるべき問題だと思いました。貴重なお話ばかりでした。ありがとうございました。
(岸本依子)